

横浜市小児科医会ニュース

No. 1 1990年9月1日

横浜市小児科医会 広報部発行
〒231 中区麦田町4-99 (野崎方)
TEL (045) 622-8676

残暑厳しき折から諸先生には益々御清栄の事と拝察致します。

さて、去る4月13日に新らしく生まれ変わった横浜市小児科医会の第1回総会が開催され、盛会裡に無事に終わりました事は御同慶の至りであります。

そして、今回ささやかな広報活動の一つとして、本ニュースが始めて発行されました事も誠に喜びにたえません。総会報告記事に示されておりますように、医会の目的達成のため、事業内容の充実を図るべく、常任幹事一同で目下鋭意努力中であります。未だ初年度で十分の予算がありませんが、お蔭様で会費の徴集も比較的順調に進んでおり、秋の研修会の予定も決まり、徐々に前進しております。

今後より充実した会にするべく、会員各位の御理解、御協力をお願い申し上げます。

五十嵐 鐵 馬

各科医会長と市医師会執行部との
連絡協議会
平成2年7月13日 於 市医師会会議室

市医師会長より新財源が生じ、学術関係にかなりの予算配分が予定される旨の発言がありました。具体化は先ですが、従来極めて貧弱であった各科医会への助成金も改善される見込みで、又かねてより要望していた各科医会専用の職員の雇用及び部屋の問題も解決される可能性が大となり、大変喜ばしい事です。

尚、小児科医会の要望事項として、各種委員会の小児科関係委員が、従来の慣習による組織上の欠陥から、必ずしも医会の意向を十分に反映し得ない点について、今後十分配慮されたい旨を申し入れました。

(五十嵐)

第1回 横浜市小児科医会総会

H. 2. 4.13 (金) PM 6 : 30
於 健康福祉増進センター 4 F

開会の辞

瀬川良三

会長挨拶

五十嵐鐵馬

議 事

- | | |
|---------------|------|
| (1) 平成元年度事業報告 | 野崎正之 |
| (2) 平成元年度決算報告 | 小林幹子 |
| (3) 平成2年度事業計画 | 野崎正之 |
| (4) 平成2年度予算案 | 小林幹子 |
| (5) 役員人事(新任) | 野崎正之 |
- ※ 新任 浅井綾子(南部小児科)、有本泰造(緑区小児科)

講師紹介

土橋光俊

学術講演

小児・思春期の心身症

—— 最近の動向とアプローチのあり方をめぐって ——

横浜市民病院神経科 渡辺久子 医長

閉会の辞

青木 勝

懇親会 オアシス (10F)

(1) 平成元年度事業報告

- | | | |
|----------|----|------------|
| 1) 設立総会 | | H. 1.10.22 |
| 2) 役員会 | 1回 | H. 2. 3.13 |
| 3) 常任幹事会 | 2回 | H. 1.12. 7 |
| | | H. 2. 2.15 |

(2) 平成元年度決算案

- | | | | |
|-------------|--|----------|-----------------------|
| 1) 収入の部 | | 646,023円 | |
| 内 訳 | | | |
| 1 前期繰越金 | | 298,423円 | 279,823円+18,600円(先払金) |
| 2 会費 | | 177,000円 | 59名×3,000円 |
| 3 市医師会補助金 | | 120,000円 | |
| 4 協賛金 | | 50,000円 | ワイス |
| 5 雑収入 | | 600円 | 利子 |
| 2) 支出の部 | | 310,563円 | |
| 内 訳 | | | |
| 1 総会・懇親会 | | 177,000円 | オアシス |
| 2 総会会場費 | | 18,600円 | 先払金 |
| 3 講師謝礼 | | 50,000円 | |
| 4 役員会・幹事会 | | 34,200円 | 内 5,000円未払 |
| 5 通信費 | | 7,783円 | |
| 6 雑費 | | 22,980円 | |
| 3) 差引残額 | | 335,460円 | |
| 内 訳 | | | |
| 1 現金 | | 92,389円 | |
| 2 郵便貯金 | | 200,271円 | |
| 3 預金(市医事務局) | | 47,800円 | |
| 4 未払金 | | -5,000円 | 市医研修室借用料 |

(3) 平成2年度事業計画案

- 1) 専門知識の増進 …………… 学術講演会(年2回) 予防接種情報の伝達
- 2) 小児保健事業の推進 …… 母子保健の充実 保育園医、幼稚園医の組織化
- 3) 会員相互の親睦 …………… 会員名簿作成
- 4) 広報活動 …………… 会員相互の情報交換 市民へのPR
- 5) 学校保健 …………… 学校医師会諸事業への協力
- 6) 保健医療 …………… 保健医療の知識の普及と適正化
- 7) その他 …………… 行政との対応等

(4) 平成2年度予算案

1) 収入の部			1,200,000円	
内 訳	1	前年度繰越	335,460円	
	2	会費	480,000円	¥3,000×160
	3	市医師会補助金	120,000円	
	4	賛助金	250,000円	賛助金
	5	その他	14,540円	広告料、利子等
2) 支出の部			1,200,000円	
内 訳	1	会議費	300,000円	総会、役員会、幹事会
	2	通信費	100,000円	
	3	事務費	60,000円	
	4	講師謝金	100,000円	
	5	弔慰費	100,000円	
	6	渉外費	150,000円	
	7	交通費	50,000円	
	8	広報活動費	100,000円	
	9	名簿作成費	100,000円	
	10	予備費	100,000円	
	11	雑費	40,000円	

庶務だより

1 会 員

平成2年度会費納入者229名(7月20日現在)

2 会 議

イ 総 会

H. 2. 4.13 於 健康福祉増進センター
4F講堂(59名)
総会終了後学術講演会及び懇親会を行った。
講師：横浜市民病院神経科
渡辺 久子医長
演題：小児・思春期の心身症

—最近の動向と

アプローチのあり方をめぐって—

ロ 役 員 会

H. 2. 3.13 於 横浜市医師会研修室(10名)

ハ 常任幹事会

H. 1.12. 7 於 警友病院(7名)

H. 2. 2.15 於 警友病院(6名)

H. 2. 4. 5 於 警友病院(6名)

H. 2. 5.18 於 アトラス十番館(6名)

H. 2. 7.26 於 アトラス十番館(5名)

3 その他

イ MMRについて：暫く見合わせた方がよい旨、各区懇話会を通じ会員に伝達。

ロ 榊田市会会長の要請に基づき、夜間急病センターへの小児科医の一層の出動協力を依頼。

4 今後の予定

イ 役 員 会

H. 2. 9.11 於 市医師会研修室 6F

ロ 研 修 会

H. 2.10.19 於 健康福祉増進センター 4F

ハ 会員名簿発行予定 (野崎)

会計だより

会費納入状況につき、お知らせ致します。

払込用紙によるもの 計 59万7,000円

現金払いによるもの 計 9万円

計 68万7,000円で229名分です。

以上、7月20日迄に払込みされたもので、それ以後払込みはとだえています。

名簿作成上、未納入者は至急払込みお願いします。不明の際は、旭区 小林幹子まで。(小林)

小児・思春期の心身症

— 最近の動向とアプローチのあり方をめぐって —

横浜市民病院神経科 渡辺 久子

人のライフサイクルにおいて小児期・思春期は生涯にわたる基本的な生き方の作られる原点である。現代は平均寿命の伸びや急激な社会変動のため、人生は長く複雑になり、その分土台づくりとしての小児期・思春期の心身の健やかな発達が一層重要である。

ところが社会の急激な都市化、工業化、核家族化、地域社会の崩壊、女性の職場進出などにより、子供の発達環境は急激に変容している。周囲のサポートのない孤立した密室の母子関係の中で、育児ノイローゼや小児の心身症、情緒障害が増加し、家庭内で虐待や母性的養育の剝奪が生じている。また医学の進歩に伴い、周産期障害、新生児集中治療、未熟児や先天性障害児らの情緒発達の問題も増加し、小児期・思春期の発達が時代の変化と共に多様化複雑化している。次代を育てる小児科医には幅広い臨床的視点が求められる。

現代の社会変動の中で児童期思春期の心身症が増えているが、最新の乳幼児精神医学によると、子供は胎生期後期より記憶を持ち、誕生後より外界を鋭敏に認知し、様々な刺激をすでにストレスと感じ始めるらしい。

特に母親がその発達段階や性質にあった抱き方、目の合わせ方、声のかけ方などのよい接し方、すなわち情緒的な応答性 (emotional availability) を示し、自分の愛着要求を満たしてくれるかどうかが大変である。その際、乳幼児の情緒表現のリズム、強弱、振幅に波長を合わせて生き生きとした相互作用を作り出す情動調律 (affect attunement) が大切であり、それは母親自身の精神衛生がよくないとうまくいかない。

ところが一方で、乳幼児の存在は母親の無意識の乳幼児体験の葛藤を呼び覚ます。そのため、

例えば虐待されて育った母親は不安と緊張にかられて思わず我が子を虐待してしまったり、母子の相互交流には世代間伝達も起きやすい。どの母親がその生い立ちや現在の夫婦関係ゆえ不安定かを、小児科医が把握しサポートすることが大切である。

どんな症状でも、まず小児を一人の人格をもった全体としての存在と捉え、生活状況のタテ (生活史) とヨコ (現在の家族関係) の絡み合いから、問題の本質を理解していく。子供の問題は常に誕生からの身体、心理、家族、社会などの複数の要因の相互作用からなる。症状が多彩、びまん性で、不利な条件が重なるものほど予後は悪く、症状が局限し、背景に要因の少ないものほど予後がいい。子供の問題の多くは流動的で、発達の危機のサインと捉えて対応をすることが基本である。症状が一見激しくても子供の全体の発達が前進している限り暖かく見守ってよい。しかし発達それ自体が停滞したままの時は問題の解決に真剣に取り組まねばならない。またいくら症状が消えても、甘えたり、訴えたり、遊んだり、けんかしたり、子供らしい喜怒哀楽や依存欲求や自己主張が見られなければ健康な心の発達とはいえない。

母親を支えること。特に現代の核家族において、母親がいかにささいなことで緊張し、焦りや孤独感に悩み易いかを理解する必要がある。母親の訴えをじっくりと聞き、不安の解消に役立つような育児情報や知識の与え方が大切である。孤立した都会の母子を支え直すには父親、祖父母、隣人や地域の人々、保健婦や保育園の保母ら大勢の大人の協力も必要であり、育児のためのネットワーク作りにむけて小児科医の果たせる役目は大きい。

(第1回総会講演要旨)